

## コメント

Education and Study of Solio-Informatics

伊藤 守

伊藤です。よろしくお願ひ致します。コメントということですが、実は昨日、大國さんと千葉さんから、どういう報告をするのかということ聞いたので、思考する時間もほとんどありませんでしたが、話したい内容をパワーポイントにまとめて来ました。私の問題関心に即しながら、少し話をさせて頂きたいと思ひます。

実は今回の研究会ですが、秋に森田学部長と東京でお会いしまして、先ほどの話にも出ましたが、昨年、社会情報学会が新たに発足して、会員が760人程度の学会が出来た、ということが一方であり、こちらの札幌学院大学の社会情報学部が出来て21年ということもあり、せっかくの機会なので、この札幌学院大学の社会情報学の教育と研究でどこまで、どのようにやれたのかということと、全国の社会情報学があるところと共有しつつ、これまでの社会情報学としての展開を検証するという機会を作っても良いのではないですか、ということをお話ししました。そして千葉先生が退官されるということですので、それにあわせて出来るの良いねということで、今日、私もコメントする機会を与えて頂いた訳です。嬉しく思っています。

これは前提と言ひますか、私自身の千葉先生へのコメントになるのかも知れませんが、私の認識では、田中先生が2000年に学会で報

告をされたら、先ほど千葉先生から報告がありましたら、個人的にも私は今、社会情報学の教育研究が飛躍的に発展していく必要性が高まっていると思ひています。そのように思ひきかけの一つはこの間のフェイスブックやツイッターなどのソーシャルメディアが登場したことによってメディア環境が激変していること、これが理由の一つでもありますし、昨年、一昨年とこの大学で震災を社会情報学がどう受け止めるのか、というシンポジウムをおこなった訳ですが、やはり二年前の東日本大震災、それから福島原子力発電所の事故の際の社会情報空間がどういふ空間だったのか、ということですね。これも大きな理由です。非常に色々な課題を抱えたということは明らかだと思ひます。マスメディアもそうですし、SNSもそうですし、国の広報、メディア活動もそうですし、それから科学者や専門家の情報提供の問題も含めて、情報空間がどうなっているのか、ということが本当に試されたし、検討する良い事象になってしまったということが、凄く大きい訳です。

その問題に関しては今年の学術会議で出している『学術の動向』という月刊雑誌が出されていますが、その4月号に私も書きました。今回、日本の社会情報空間が示した大きな問題を考えるにつけ、社会情報学の本当に飛躍的な発展が求められている。そのような中で教育と研究で何がこなわれ、どう進展して、今後何が必要なのかということを考えてみるのは今の時期、非常に重要なのではないで

しょうか。

今日は教育については、殆どお話は出来ませんが、群馬大学や大妻女子大学、呉大学など社会情報学部を持っている学部の教育も、当初発足した時からはかなり変わってきていて、社会情報学の一部に特化したところで教育プログラムを作っていく、というふうに変化してきている。例えば呉大学の場合、経営ビジネスに特化していますし、大妻ですと生活情報に特化していて、最初に考えていた情報科学と社会科学全体を統合した、あるいはそれを包括するような社会情報学ということでカリキュラムを組んでいるのは多分、群馬大学とこの札幌学院大学くらいかなという印象を持っています。

そう意味で、教育のカリキュラムの問題はこの10年間でかなり変化してきていると思いますが、もう一方で先ほど言った、社会情報学研究、あるいは教育の重要性というところから見て、これは希望と期待も含めてですが、どの大学でも1年、2年次に履修すべき科目として社会情報学と言うものが設定をされて良い位に、その重要性が高まっているのではないかと思います。

その際、どういう教育目的かということでは、先ほど千葉先生から出していただいた内容が明快です。これは素晴らしいですね。「社会的関係性において、情報の意味や価値が理解出来、社会に対して的確に情報を発信できる知識と技術を体系的に学べる（身につける）」p18と言う、非常にすっきりしています。社会情報が教育目標として掲げるべきものが端的に示されたのではないかと思います。こういう意味での社会情報学の教育というのは今本当に大学教育の中でも必須だと思いますし、高校の情報教育、これもAとBがありますが、まだまだこの社会情報学の教育理念に沿った、高校の情報教育というものも不十分なまま来ているので、この点でも重要だと考えています。

それからもう一つ、社会情報学自体の道筋をどういうふうに描いて行くのか、というのも大事だと思うのですがもう一つ、他の学問分野への貢献、あるいは他の分野との接合を視野にこの社会情報学で培われてきた研究と教育をどういうふうに広げていくか、あるいは接合させていくかということも、教育上は重要になっていますし、研究上も今それが求められている。これがお二人の方に対してコメントを付ける前提ということです。

少し研究の方に力点をおいて話をしたいと思います。先程、千葉先生の方から学問的な社会情報学の構成を考えた時に三つのレイヤーがあるというお話がありました。一つは社会情報学基礎論、社会情報解析、それから社会情報研究各論という三つの階層で学問的な構成を考えるという、これは私にとっても非常に説得的で是非このような形で構成が出来れば本当に良いなと思っている訳ですが、このいずれの領域でも、この20年で非常に大きな前進があったと私は考えています。

まず、第一のレイヤーについて考えてみましょう。ここで、付け加えておくと、今まで社会情報学に関するテキストというと、東京大学出版会から出された『社会情報学ハンドブック』という二冊本があります。それから早稲田大学から出した『社会情報学シリーズ』という四冊本があります。それともう一冊、「社会情報学テキスト」という、大きく言うと四冊があつて、石井さんも「社会情報学」というタイトルでお書きになっている本がある訳ですね。その早稲田大学で出した時に私も編者の一人でしたが、確かあれば、10年位は経っていて、その時に出したのは領域ごとに「社会情報学」というのを各執筆者に書いて貰うという構成でした。これで言うと「社会情報研究各論」が並んだということだった。しかし今、それから10年近く経って、この三つのレイヤーで社会情報学のテキストが作れる

という状況になってきたかなと思っています。社会情報学基礎論や理論、それから社会情報学解析が組み込む形で、それなりのテキストを作るバックボーンが出来つつある。実際に出版しませんかというオファーがもう来ているので、今日の皆さんからの議論も踏まえ、いかなる学的構成で今度のテキストを作るのか、というのは大きな意味がある。是非、お知恵を拝借したいと思っています。

基礎理論ということで見ると、この間、情報とは何かという情報概念についての規定が田中一先生をはじめ、色々な方が非常に精緻な情報概念の規定をおこなって、しかも先ほどシャノンの情報概念の規定ということもありましたが、社会情報、社会的な情報に即して情報概念をどう規定していくのか、という点で、田中一先生、それから正村（俊之）さん、西垣（通）さんを含めて相当の厚みのある概念規定が出来てきている。

ただし、私自身は、発足した学会の創刊号（社会情報学1巻1号2012年）で書きましたが、情報概念についてはより一層の展開が可能であると思っていますし、それは必要でもある。可能なだけでなく、本当に必要であると思っていますが、取りあえず、情報とは何か、情報概念の規定に関してベースの基礎論的な部分が、積み上げが成されてきた訳です。そこで、情報概念の規定ということも一つ、基礎論そのものをどういうふうにするのかということが大事なのではないかなと思っています。情報とは何かという次元とは別に、情報過程の階層性や質的な差異ということを問題化して、それをある種、基礎論として展開をしていくという必要性がある。それが今の私の問題関心です。

ここで、社会情報学基礎論というものの中身は何か、ということを考えなくてはならない。それは、情報とは何かという大問題と同時にいくつかの問いがあるべきだろうということです。その時に情報過程を、例えば、1

対1のレベル、1対多のレベル、多対多、これは仮の設定ですが、そうした形で区分して考えてみてもおもしろいのではないかな。まだ考え抜かれたものではありませんが、取りあえず情報過程にある種の歴史性、というより階層性、層序と言って良いかも知れませんが、質的な差異を情報過程の中に捉えていくような視点が重要なのではないかなということだと思います。

次に二番目のレイヤーについて考えておきましょう。社会情報学が学として成立する上で、固有の対象領域がまず必要な訳ですが、勿論これはもう設定された、設定されていると思います。

もう一つ、学問として成立する際に固有の分析方法を持ち得るかどうかなということが、もう一つの条件だろうと思います。社会情報学が20年前に産声を上げた時の分析方法は、従来のメディア研究であるとか、マスコミ研究であるとか、あるいはもう少し哲学的な、と言って良いかもしれませんが、いくつかの人文社会系の知をベースにしていた。そして、色々な他の領域の分析方法を使いながら、少しずつ進展して来たと思います。そしてこの何年かの中に社会情報過程を分析する、分析手法が情報学の中に固有に出来つつある。このことは本当に大事なことだと思うのです。話題になっていて関心をお持ちの方も多いと思いますが、ビッグデータの解析が今は相当なされている訳ですね。またSNSに代表される膨大な情報の流れを時間的、空間的にマッピングしてどういう偏差があるのか、ハブになっているのはどこなのかを解析する、情報学に立脚した固有の分析方法が開拓されています。これは非常に大きいと思うのです。

それから、この学部にも研究している方がいらっしゃるかと思いますが、例えば文章の特質を分析する言説分析の方法があります。これも情報の数量的な分析を通して、その傾向性を見ていく一つの方法ですね。このよう

に情報学に固有の分析方法が開拓されてきたということだと思います。

それからこの点で言いますと、先ほど大國さんが報告された、アーカイブの整備によるデータの二次分析という、これも固有の分析方法として今、立ち上げられています。これにも先程もご指摘があったように色々な問題と課題があると思いますが、以上のように、社会情報学は固有に情報現象を解析出来る、あるいは解明出来る手法を身に付けつつある。ですから先程も述べたように社会情報学の学的構成と言う点で、この一番と二番のレイヤーがこの何年かの間に進展し、学的構成がとれる編成に成りつつある。そう考えているわけです。

それで、次に第三のレイヤーである「社会情報研究各論」の方ですが、この分野も多角的に展開している。例えば、分野が違うところで言うと情報法も多分そうでしょうし、あるいは、今日の新聞に掲載されていましたが、与党と野党の間で結局、合意は出来なかったということですが、ネット上での選挙活動が多分可能に成ります、そう成った時に、例えば政治行動や政治的判断がどう変化するかというのは非常に重要なテーマですね。今までの例えば、マスメディア経由だけの情報で判断をしていたものが大量のSNSを通じた情報で判断が出来るようになっていくということは、政治学にとっても重要なテーマになっていくと思います。まあ、そのように政治学や他の学問分野ともリンクした社会情報研究の各論というのは今後、益々展開していくことは間違い無いですし、現在も展開しているということだと思います。

さてそこで、先ほど問題提起した情報過程の階層性ということ、考えてみたいと思います。

これを説明するだけでかなり時間がかかりそうなので、簡単に説明します。便宜的なものです、情報過程を例えば認知情報を取得

する、それから認知情報に基づいて評価情報を算出する、評価情報に基づいて誰かにそれを伝えていく、指令情報、という3つの区分があります。これは私の用語では無く吉田民人先生の用語です。ご存知の方も多と思います。

もう一つ付け加えておきたいと思います。データベース、あるいはアーカイブ化ですね。単体と書きましたが、単体でこの情報過程というのが閉じている場合も勿論あるわけです。例えば、人間の場合もそうです。何らかの認知情報を取得して自分の中でそれを評価し、どう行動していくか、あるいはそれを他人に伝えていく。機械系の情報処理システムでもそれはあり得るし、実際にあるわけです。例えば、室内の温度を感知し、評価して室温を上げるか下げるか、サーモスタットですね。これは単体の閉じた情報処理過程です。次に「1対1」の情報モデルで、シャノン、ウェーバーのコミュニケーションモデルでもあるし、従来、この「1対1」、つまり送り手と受け手がいて、例えば送り手は認知情報を自分なりに評価して、伝達して、他者に伝え、他者がもう一度フィードバックされていくというコミュニケーションモデルがある。

もう一つ、これは書かなくても良いかも知れませんが、「1対多」、まあ、これは従来マスコミュニケーションモデルと言われていたものです。これはちょっと括弧に入れておきますが、これとは別にもう一つ、現在起きているのは多分、「多対多」という大量の高速の膨大な情報が常に移動をしていて、「1対1」とのコミュニケーションモデルとは明らかに違う情報過程を組織している。そこには質的な差異があるし、複雑性の差異が関わっている。しかもここで、いわば認知、評価、指令された情報がデータベース化されて、アーカイブ化されて、今度はアーカイブ化された情報過程を通して、もう一度、新しい認識、評価が産出されるという情報の階層性が出来て

いく。情報過程のメタ階層化と今ここでは呼びたいのですが、データベースに結びついているのですね。情報とは何かということと同時に、情報過程が、単体レベルでおこなわれている場合と、「1対1」でおこなわれている場合、それから「1対多」の場合、それから「多対多」でおこなわれている場合で、情報過程に質的变化があるだろうと、これをどう考えていくのかということもある。

後は簡単に纏めたいと思いますが、この「多対多」という情報過程が組織されている中で、社会情報学が今後、取り組んでいくべきというか、チャンレンジな課題というのがあるのでしょうか。一つは少し大きな話ですが、現代の知の在り方や知の布置に関して社会情報学はいかに問題化出来るのか、というテーマです。「科学的な知」、あるいは「確実な知」というものと、「大衆的な知」とでもいべきものとの境界が不明瞭化し、両者の関係が変化していく事態をここでは念頭においています。

例えば将来、何かが起こるかと言った場合、確率論的に何パーセントの確率でしか、あるいは何パーセントの確率で起きるといふ事象として、将来の見通しに関しては確率論的にしか言うしか無いのですね。それを科学者自身、専門家自身は良く分かっている訳ですが、実は市民と科学者の間でその認識にずれがある。一般の普通の市民の方達にとっては科学的な知というのは、言わば非常に単一なものとして、確定したものとして考えられている。今回の原発事故、あるいは震災報道に関して市民と科学者の間の相互のずれ、認識のずれというのが非常に大きくなったし、逆に言う科学者の専門性という点についても、市民の側からも大きな不信の眼差しが生まれている。それから科学者の間でも実は異分野同士で科学者がどういうふう、その問題に対処していくのかという点で科学技術コミュニケーションが上手く組織出来ていないという

ことがあります。ですから、異分野の科学者同士の間、それから市民と科学者同士の間で、科学技術コミュニケーションをどういうふう組織していけるのかということが、大きな焦点となっている。

この科学技術コミュニケーションに関わる現代的な状況はたしかに二年前の福島原発事故や震災を契機にはしていますが、実は高度に発達した情報社会にとって通時的に重要な非常に大きなテーマなのだと思います。それから、「多対多」という新しい社会情報過程に戻ると、上記の問題は別の角度から捉えることができます。つまりこういうことです。ね、認知情報に関して、この「多対多」の新しい情報過程が組織される中で、認知情報を巡る、ずれや齟齬や対立、認知情報そのものの多元化が極端に進んでいく可能性が広がるわけです。それに対して、それに対する評価も勿論多元化されているという状況になっているわけです。従来のマスコミモデルでしたら、ゲートキーパーがいて認知情報をどこかで縮減し、評価も専門家あるいは送り手側がどこかでそれを判断して流していくということと済んだ訳ですが、そうではない情報環境になって来ているのがこの「多対多」ということです。

こういう環境の中で社会的意思決定、あるいは合意のプロセスの在り方に対して、社会情報学は何が出来るか、という問題がますます重要になっている。言わば民主主義と社会情報学、情報化の中の民主主義と社会情報学というテーマかも知れませんが、さっき千葉先生のお話に出た集合知ですが、異質な意見や多様な意見の中で差異的な解を算出するプロセスですね。これはシステムとしてどう実装化し、それを論理的に明らかに出来るのかということと、勿論、それを社会的にどうやって制度化していくのかという、双方の問題が絡んでいる訳ですけれども、こうした問題について社会情報学が何を主張出来るのか

か、これも一つの焦点になっている。

それから最後ですが、これはアーカイブの問題ですね。情報のメタ階層化と一応、ここでは揚げましたが、あらゆる情報が蓄積され、アーカイブ化されていくという時代ですね。先ほど大國さんの方からは、正に散逸してしまってここで単純にあらゆる情報が、とは言えないでしょうというご指摘があるかも知れませんが、しかし、「あらゆる」と付けなくても多くの情報が蓄積され、アーカイブ化されていく時代ですね。逆に言うと、これは変な言い方かもしれませんが、今後、私たちは過去に包囲されてしまう時代に入っていかもしれない。その時に何を選択して過去から何を救出していくのか、その際の方法や基準は何かということが改めて問い直されるということだと思う。大國さんの方は社会調査のアーカイブ化ということで報告をされましたが、私自身もこの間アーカイブ化に関わっていて、一つは今、国立国会図書館で映像を含めた映画、それからテレビ番組を含めたアーカイブ化をする必要が有るのか、無いのかという議論をしています。その議論の中に私も入っていて、それをどう進め得るのかという議論をやっています。その際、正に全ては出来ないで、何を選択するのかということですね。これを検討せざるを得ないその方法や基準は何かということですね。

それからNHKが持っている番組、これはアーカイブ化されていますが、実際は公開、再利用するというシステムにはなっていない訳です。3年前から研究者に対してだけは1年間で10人程度ですが、トライアル研究と称してNHKの番組を研究者に公開をして、二次利用し、研究目的で利用して貰うというシステムがようやく始まりました。それから、これはちょっと蛇足ですが、今年度の後期に私の科目でNHKの過去の番組30本、現代の沖縄(史)、沖縄現代史に関わるドキュメンタリーを、著作権処理を行って、講義に参加

した学生だけにサーバーを立ち上げて、自宅でも見られるシステムを構築しました。講義の前も後も見られるというシステムを作って、高等教育にNHKのアーカイブ番組を活用していくという、一つのプロジェクトを実施して、それもこれから拡大していこうと思っているところですが、もう一つ考えなければいけない、これは大國さんも多分考えられているでしょうけれど、アーカイブをどうやって活用していくのか、公開し再利用をしていくのかという時に、今、総務庁は国が実施した社会調査に関してはある意味、再利用をしていくという方法に踏み出そうとしていて、ですがそれは多分企業向けに貸し出し料金を徴収してやる方向に進んでいくだろうと思うのです。そのいう中でアーカイブを公共財として、どうやってそれを公開し、再利用をしていくのかということ、制度としてどうやって作り出していくかということが、社会調査に限らず様々なレベルで今問われているという状況だと思います。

例えば、映画や番組の問題で言いますと、再利用は出来ない訳ですが、こういう議論があります。例えば、番組を公開する。全面公開は難しいにしても、一つの第一歩としてその地域で撮られた映像は地域に戻してそこでは見られるようにしようと。記憶の問題ですね。そんな議論が始まっていて、そうすると大國さんがおこなっている、その社会調査のアーカイブを、社会調査をおこなったその地域にどうやってフィードバックをかけていくかも考えて良いのではないのでしょうか。公共財として開いて行く、一つの在り方かもしれないですね。勿論、先ほど言われたように著作権や肖像権とか、プライバシーだとか、映像に関しても本当に全てクリアしないと出来ない様々な問題を抱えている訳ですが、大きな流れとしてみるとアーカイブを公共財としてどうやって組織していくのか、公共財で有るが故に利用の仕方はどうしていく

か、活用の仕方はどうしていくのか、ということが重要になって来ている。長くなってしまいましたが、その新しい環境の中で社会情報学はチャレンジングな課題として現代の知、あるいは知の布置に関してどういうふう

に社会情報学が取り組んでいけるのか。それから合意のプロセスですね。情報社会における民主主義と社会情報学というテーマ、これは非常に大きいテーマです。それから、情報

のメタ階層化がされたなかでの「アーカイブ化社会」で情報やデータを公共財として利用していくためにどんな道筋を作れるか、ということも社会情報学の大きな課題になっている。雑駁でしたが、私の方は千葉先生と大國さんから送って頂いたデータで、感想めいたことをコメントさせて頂きました。

**司会**：有難うございました。

(拍手)